

# 長峰遺跡 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第462集

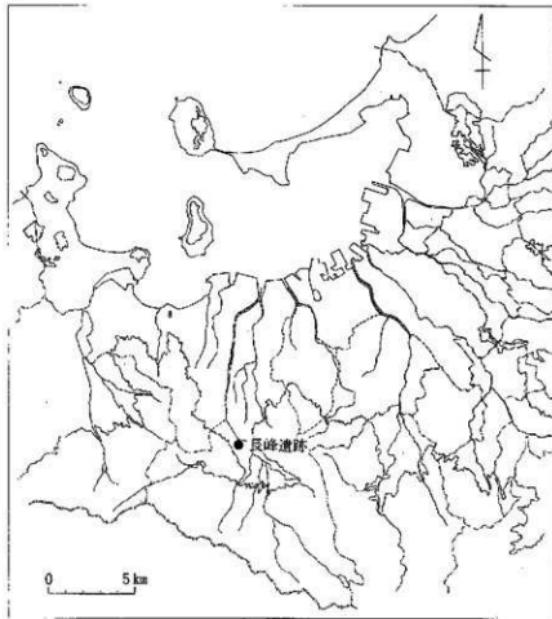
1996

福岡市教育委員会

NAGA MINE

# 長峰遺跡2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第462集



長峰遺跡2次 調査番号 9462  
遺跡略号 NGM-2

1996

福岡市教育委員会



## 序 文

福岡県の北西部、玄界灘に面する福岡市には、豊かな自然と歴史遺産が残されてきました。それらを残し後世に伝えていく事は、言うまでもなく私たちの努めであります。しかし、近年の著しい都市化により、それらが失われていくことも事実です。

福岡市教育員会では、やむなく失われていく遺跡について、事前に発掘調査を行い、記録保存に努めております。

本書は、土取りに伴い調査した、長峰遺跡2次調査の記録を報告するものです。調査では弥生時代の堀塁墓地を中心とした造構と遺物を発見しました。この結果、これまでにはっきりしていなかった長峰遺跡の性格の一部を明らかにすることが出来ました。この結果、この地域の歴史、特に弥生時代の社会の問題についても明らかになりつつあります。

本書が埋蔵文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くのかたがたのご理解とご協力をたまわりましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成8年3月29日

福岡市教育員会

教育長 尾花剛

## 例　　言

1. 本書は早良区の板倉英雄氏の土取りに伴い、福岡市教育委員が1995年2月13日から3月10日にかけて発掘調査を実施した長峰遺跡第2次調査の報告書である。
2. 本書の表記は、ST-壺棺墓、SX-その他の遺構とした。
3. 本書使用の標高は海拔高であり、方位は磁北である。
4. 本書使用の遺構実測図は、金宰賢、石井博司、池田祐司が、遺物実測図は池田が作成した。
5. 本文中の写真は、遺構を池田、遺物を平川敬治が撮影した。航空写真については南空中写真企画に依頼した。
6. 本書の作成にあたっては先に挙名した他、上田保子、前田みゆきの協力を得た。
7. 本書の執筆は、本文を池田が、付論は挿図、図版を含めて金宰賢、石井博司、田中良之が行い、池田が編集した。
8. 本書に関わる図面、写真、遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

遺跡調査番号：	9462	遺跡略号：	NGM-2
地番：	早良区大字東入部735-2	分布地図：	一ツ家・早良16-0461
開発面積：	35m <sup>2</sup>	調査対象面積：	35m <sup>2</sup>
調査期間：		1995年2月13日～1995年3月10日	

# 本文目次

Iはじめ	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II位置と環境	1
III調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	6
1) 墓	6
2) その他の遺構	13
3) 表採遺物	13
IVおわりに	14
付論 長峰遺跡出土の人骨について 金宰賢・石井博司・田中良之	15

# 挿図目次

Fig. 1 早良平野の墓	2
Fig. 2 周辺の遺跡群	3
Fig. 3 調査地点位置図	3
Fig. 4 調査区位置図	4
Fig. 5 遺構配置図	5
Fig. 6 遺構実測図	7
Fig. 7 出土遺物実測図1	8
Fig. 8 出土遺物実測図2	9
Fig. 9 出土遺物実測図3	10
Fig. 10 出土遺物実測図4	11

## 図 版 目 次

- |       |                      |                        |
|-------|----------------------|------------------------|
| PL. 1 | (1) 調査前 (南西から)       | (2) 調査区、早良平野を望む (南西から) |
| PL. 2 | (1) 調査区全景 (東から)      | (2) 調査地点周辺             |
| PL. 3 | (1) ST01 (北から)       | (2) ST02 (北から)         |
|       | (3) ST03 (南から)       | (4) ST04 (南から)         |
| PL. 4 | (1) ST05 (北から)       | (2) ST06 (東から)         |
|       | (3) ST07 (北から)       | (4) ST08 (南西から)        |
| PL. 5 | (1) ST05人骨出土状況 (北から) | (2) ST05人骨出土状況 (西から)   |
| PL. 6 | 出土遺物 1               |                        |
| PL. 7 | 出土遺物 2               |                        |



ST05 (南西から)

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

長峰遺跡は40年代、土取り中に出土した甕棺が福岡県教委によって調査され、1978年の分布調査の際、長峰甕棺遺跡として確認された周知の埋蔵文化財である。

平成6年、板倉英雄氏が水田補修の為に土取りを行った際、甕棺が人骨を作って出土し、西区役所を通じて埋蔵文化財課に通報があった。埋蔵文化財課が現地を踏査を行ったところ、甕棺2基が露出しており調査の必要を確認した。本調査は、土取りが計画されている35m<sup>2</sup>について、平成7年2月13日より同3月10日まで国庫補助を受けて行った。

### 2. 調査組織

調査委託 板倉英雄

調査主体 福岡市教育委員会教育長 尾花剛

調査統括 文化財部長 後藤直

埋蔵文化財課長 折尾学

埋蔵文化財課第1係長 横山邦嗣

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 内野保英

事前審査 主任文化財主事 山口穰治

埋蔵文化財課第2係 菅波正人

調査担当 埋蔵文化財課第1係 池田祐司

調査補助 井村公洋 土橋崇子（九州大学）

調査にあたって、地権者板倉英雄氏には様々な便宜をはかっていただいた。また調査、整理においては、田中良之氏、溝口孝司氏、埋蔵文化財課諸氏にご指導、ご援助を賜った。

## II. 位置と環境

長峰遺跡は室見川の上流域左岸、背振山系から長垂山へ南北に連なる山塊から東に突出した丘陵上に位置する。早良平野の最奥部にある。1次調査地点は丘陵が平野部にやや突き出た先端に位置し、標高61mを測る。主に中世の集落遺構、遺物と古代の遺物が検出されている。弥生時代の甕棺は、破片が少量出土したのみである。今回の調査地点は、1次調査地点の西50mに位置し、標高約77mを測る。丘陵は痩せており、両側は急な斜面で標高差は西側で13mほどある。調査地点は見晴らしがよく、眼前には室見川を挟んで東入部遺跡が並び、その向こうには早良平野が一望できる。

早良平野には、Fig.1に示したような分布で甕棺墓が知られている。その立地は、砂丘、洪積台地、沖積微高地、扇状地、丘陵と様々である。<sup>(1)</sup>このなかで平野の南半について見てみると、大まかに平野部の微高地、油山からの丘陵裾部、室見川西岸丘陵部に分布する。

油山側には、飯倉唐木、野芥岩隈、浦田甕棺遺跡が小丘陵上に点的に分布する。この地域は、周囲



Fig. 1 早良平野の秦棺墓 (1/60000)

- |           |                |             |            |
|-----------|----------------|-------------|------------|
| 1. 西新可遺跡  | 11. カルメル修道院内遺跡 | 21. 重留遺跡    | 31. 太田遺跡   |
| 2. 藤崎遺跡   | 12. 片江菟棺遺跡     | 22. 熊本遺跡    | 32. 古式遺跡   |
| 3. 鷺浜遺跡   | 13. 宝台遺跡       | 23. 東入部遺跡   | 33. 都地遺跡   |
| 4. 有田遺跡   | 14. 丸尾台遺跡      | 24. 東入部遺跡   | 34. 滝江谷遺跡  |
| 5. 有田遺跡   | 15. 田隈遺跡       | 25. 中通妻棺遺跡  | 35. 黒塔妻棺遺跡 |
| 6. 有田遺跡   | 16. 田村遺跡       | 26. 西方久保遺跡  | 36. 黒塔△遺跡  |
| 7. 原東遺跡   | 17. 岩隈菟棺遺跡     | 27. 野方中原遺跡  | 37. 長峰遺跡   |
| 8. 鮫倉唐木遺跡 | 18. 蒲田妻棺遺跡     | 28. 西方塚原遺跡  |            |
| 9. 鮫倉E遺跡  | 19. 田隈遺跡       | 29. 菅根戸原B遺跡 |            |
| 10. 清泉寺遺跡 | 20. 四箇古川遺跡     | 30. 菅根戸原C遺跡 |            |



Fig. 2 周辺の道路群 (1:8000)



Fig. 3 調査地点位置図 (1:4000)

の開発が早い時期に行われたため  
集落遺跡等の調査例が少なく、道  
路の広がりがつかみにくい。墓地  
は丘陵斜面に築かれる。

平野部では田村、因箇、田畠遺  
跡で小規模な壇棺墓が確認されて  
いる。重留遺跡では前期の壇棺が  
数基ずつ散在し、隣接して集落を  
伴う傾向がある。さらに南の東入  
部道路では方形区画に囲まれた  
130基の壇棺と30基の木棺墓から  
なる墓地（前末～後初）が検出さ  
れ、墳丘墓の可能性も指摘され

いる。墓域の周辺では前期、中期の集落も検出されている。また、近接する中通壇棺遺跡では、神社  
境内で壇棺が確認され、やはり墳丘墓の可能性もささやかれているが実体は不明である。いずれにし  
ても東入部遺跡は他の平地部の壇棺墓とは様相を異なる。室見川西岸では、北側に野方久保、羽根  
戸、吉武といった大規模な集落とともにならう壇棺墓地が知られる。蔚状地状の緩やかな傾斜地に位置し、  
古武遺跡にいたっては1000基を超える壇棺墓が検出されている。その南の河岸段丘上には都地、金武  
遺跡が拡がり、段丘の先端付近に壇棺墓が確認されている。浦江から南では丘陵と室見川が近接し、  
平地が限られてくる。ここでは浦江谷、黒塔壇棺墓、黒塔遺跡といった丘陵の先端部分に壇棺墓が営  
まれている。さらに南には、同様の丘陵が張り出しており、先端部で壇棺墓が確認される可能性が高いと思われる。長峰遺跡はこれらの壇棺墓の南限に位置する。

遺跡の周辺では丘陵直下の扇状地に岸田遺跡、松木田遺跡、下兵庫町遺跡が知られるが、調査が進

んでおらずはっきりとした遺跡の広がりは分かっていない。その中で、松木田遺跡では立会調査を含めて2次の調査が行われている。平成7年度に行われた2次調査では弥生時代中期の住居1基、古墳時代の住居3基が検出されている。丘陵裾部に位置し、しかも谷や旧河川が入り込むため小規模な集落が営まれていたものと考えられる。長峰遺跡に近接しており、長峰の豪棺墓を営んだ集団の候補になり得る。いずれにしても長峰遺跡の豪棺墓を営んだ集団は、宰見川西岸の小規模な集落の成員であったと考えられる。同様のことが浦江谷遺跡以南の丘陵上の豪棺墓群についても言うことができると思われる。

#### 注

- (1) 文献、詳しい概要については「吉武遺跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集 1988年を参照
- (2) 現在調査中。前期から後期初頭にかけて86基が検出され、さらに増えるものと思われる。
- (3) 樹木伐採の際に削られた斜面で確認されている。

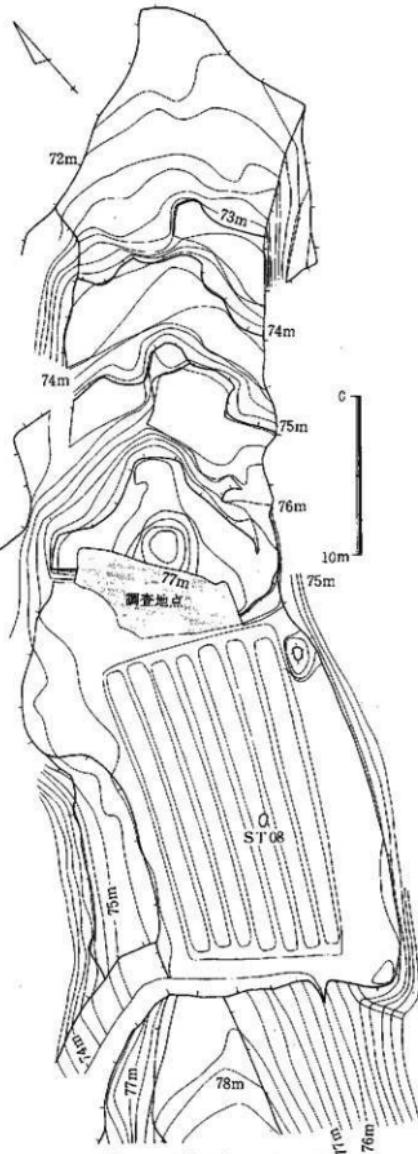


Fig. 4 調査区位置図(1/300)

### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

調査地点は頂部の幅約15m前後の緩せた丘陵上に位置する。標高77mを測り、早良平野を一望する事ができる。現在、調査地点の上方は、戦時中に行われたという開墾により約1.8mが削られ、畑として使用されている。今回の調査区は、この開墾で残丘状に残った部分である。下方は、比較的現地形が残るが、果樹栽培等で段状に削られている。苗木植えの際にも、小形の棺が出土したという。調査開始時点にはST02が崖面に露出していた。

調査は30cmから50cmの表土を除去する事から開始した。この時点でST01、04を検出した。さらに、四方の崖面の清掃時にST03、05を検出し、さらに平面、断面からの墓壙の検出に努めた。ST01等を検出した面は、黄色の強い茶色土で、墓壙埋土と類似し識別が困難だった。この面で、汚れた土を掘り下げた部分があるが、プランがはっきりせず、遺構ではないと判断した。さらに20cmから30cm下は花崗岩のバイラン土となり、容易に墓壙を追うことができた。その結果、残丘状の部分はほとんどが墓壙となっていた。そのかなりの部分をしめるST05は、土取り時に割られた箇所を除いてほぼ完形で残る。下堀からは人骨が出土した。ST06は東側の断面で確認した。ST05と切り合いがあり、前後関係の確認に努めたがはっきりとしなかった。土層からST05が切る様だが明瞭ではない。

調査区の南側は削平により約1.2mほど低く、平坦面が作られている。窓等が拡がっていたと考えられるが残っていない。北側も削平を受けるが、ST07を検出する事ができた。東側は、今回の調査区外には径2mほどのマウンドがあるが、花崗岩のバイラン土の2次堆積であり、開墾の際に盛られたものと考えられる。また、西側の畠中でST08が出土した。

以上、小形窓棺墓3基、中形から大型の窓棺墓5基を検出する事ができた。さらに、土取り時に出

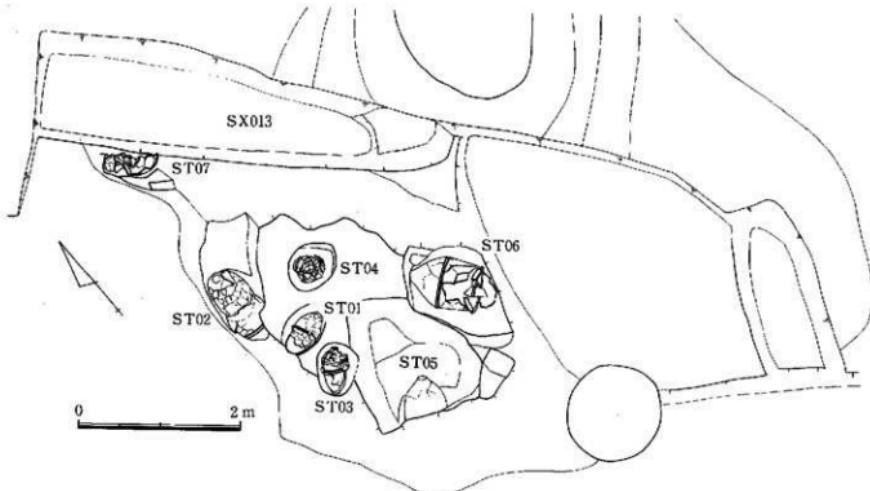


Fig. 5 造構配置図 (1/150)

土し、捨てられていた甕棺を探集し、表採品として扱った。

(注)大、中、小という分類は、連水信也「横隈孤塚Ⅱ区出土甕棺の変遷」「横隈孤塚遺跡Ⅱ」小都市教育委員会 1985によった。

## 2. 遺構と遺物

### 1) 甕棺墓

**ST01** 小形棺で調査区のはば中央に位置する。甕の合口でN-82°-Eを軸とし、埋置角度は約30°である。上甕の底部は落ちた状態であった。墓壙は不明瞭だが長楕円形で長さ70cm以上、幅46cm、検出面からの深さ40cmを測る。

**出土遺物** 出土した遺物は甕棺に使用した変形土器2点である。1は上甕に使用された甕である。胴部下部に欠ける部分が多く、接合しない。推定器高36.5cm、口径28.5cmを測る。胴部最大径は上半にあり28.5cmを測る。口縁部はL字形を呈し、口縁端部はやや厚く、跳ね上げ気味である。器壁外面は、口縁部を除き全体に縱方向の刷毛目を施し、煤が付着する。内面はナデを施す。やや茶色がかった黄色を呈す。2は下甕に使用された甕である。ほぼ完形である。器高30cm、口径30cmを測る。胴部最大径は上半にあり29cmを測る。口縁部は丸みを持つL字形を呈し、ヨコナデを施す。胴部外面は密な縱方向の刷毛目を施し、一部煤が付着する。内面はナデ調整だが口縁部近くに刷毛目が残る。外面は淡黄色、内面は淡茶色を呈す。

**ST02** 北側の崖面に、側面が一部露出していた。上甕が土圧でつぶれているが、全体が残る。上甕が中形、下甕が大形甕の合口の甕棺で、主軸をN-5°-Wにとる。墓壙は掘りすぎと削平により全体を把握できないが、長さ約70cm、幅70cm程度で、斜めに掘り込み、甕棺を墓壙に埋置角度30°で差し込む。深さ80cm以上を測る。

**出土遺物** 出土した遺物は甕棺に使用した変形土器2点である。6は上甕に使用された甕である。ほぼ完形である。器高54cm、口径39.5cmを測る。胴部最大径は上半にあり46cmを測る。口縁部は鈎先形の形態を残したく字形を呈し、口縁端部はやや厚い。内面は直線的で、屈曲部は鋭く屈曲する。外面口縁部直下には断面3角形の突帯を貼付し強くナデする。器壁外側は口縁部を除き全体に縱方向の刷毛目を施し、胴部の上2/3に煤状の付着物があるが、黒塗りの可能性もある。内面はナデを施し、下から上方向の砂粒の動きが見られる。口縁部外面には指についていたと思われる赤色顔料が付着している。やや茶色がかった黄色を呈す。7は下甕に使用された甕である。ほぼ完形である。器高67.5cm、口径34.5cmを測る。胴部最大径は中位にあり53cmを測る。口縁部は内傾する鈎先形で内面屈曲部は強いナデにより細く尖る。口縁直下には断面三角形の突帯を貼付するが、ナデは弱い。胴部最大径や以下には断面台形の突帯を2条貼付し強くナデする。胴部外面はナデ調整を施す。幅15cmの間に赤色顔料が垂れた痕がある。胴部突帯の赤色顔料は塗った様でもあるがはっきりしない。内面はナデ調整だが、刷毛目調整による木口痕が残る。淡黄色を呈す。

**ST03** ST02の南10cmに位置し、ST05を切る。下甕は一部開墾で削平を受ける。上軸をN-44°-Wにとる小形棺である。墓壙は長さ40cm、幅50cmを測る。墓壙の南北西壁を掘り込み、甕棺を差し込む。埋置角度は約30°を測る。深さは検出面から39cmである。

**出土遺物** 出土した遺物は甕棺に使用した変形土器2点である。3は上甕に使用された甕である。ほぼ完形である。器高32.5cm、口径32cmを測る。胴部最大径は上半にあり30cmを測る。口縁直下に1条、胴部最大径部直下に2条の断面M字形の突帯が巡る。口縁部はやや丸みを持つL字形を呈し、ヨコナ

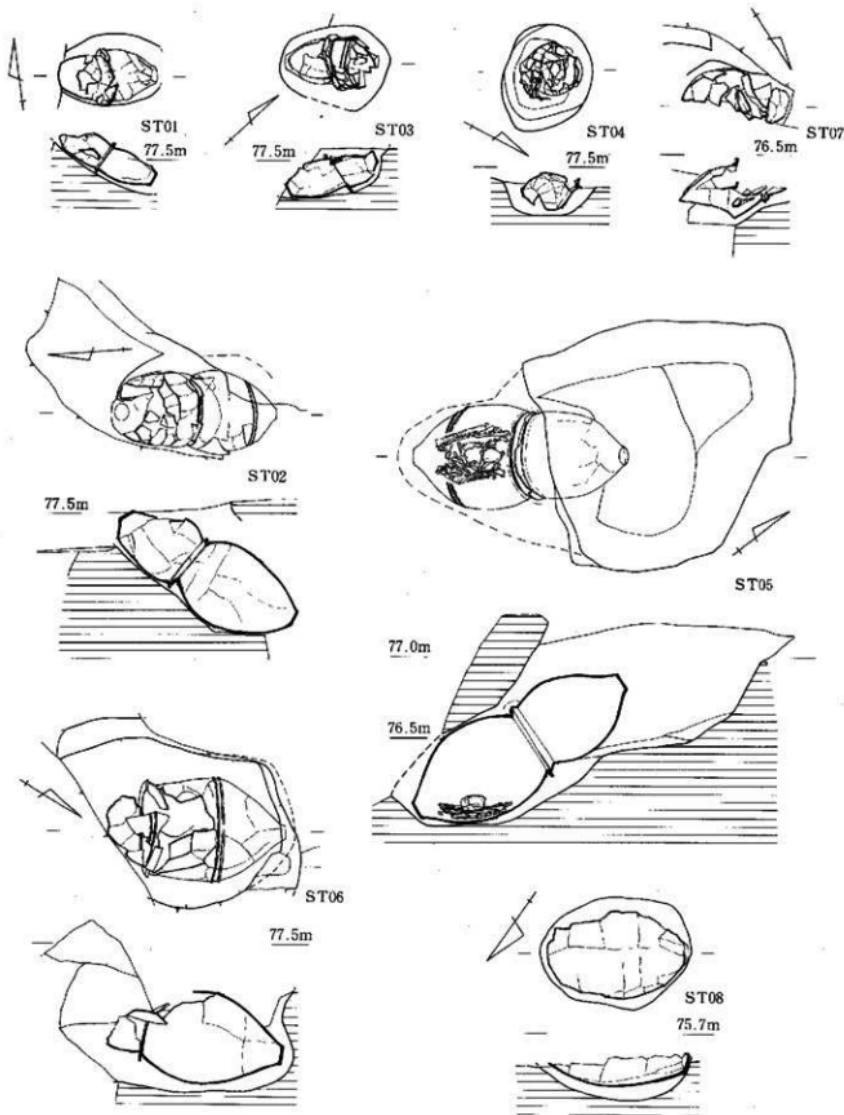


Fig. 6 遺構実測図 (1/30)

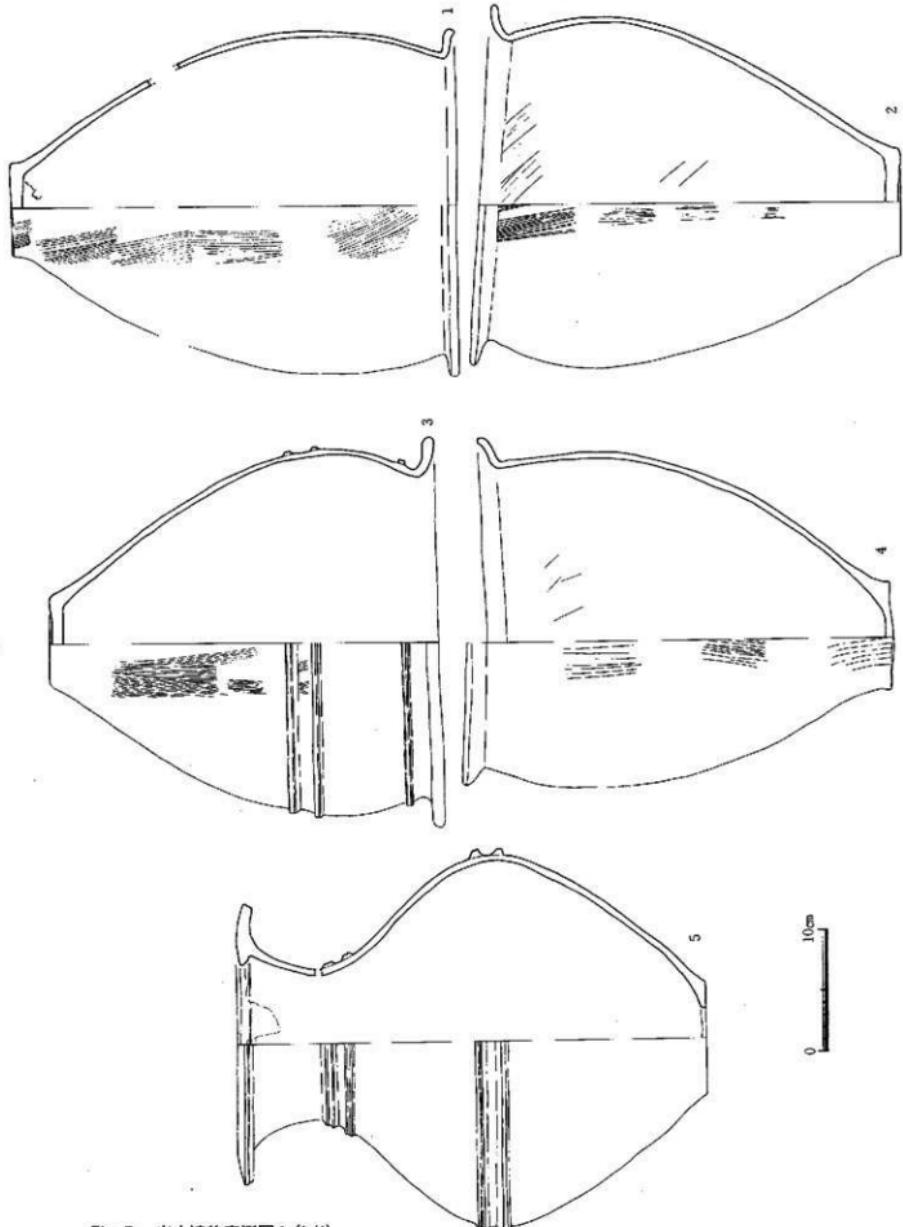


Fig. 7 出土遺物実測図 1 (1/4)

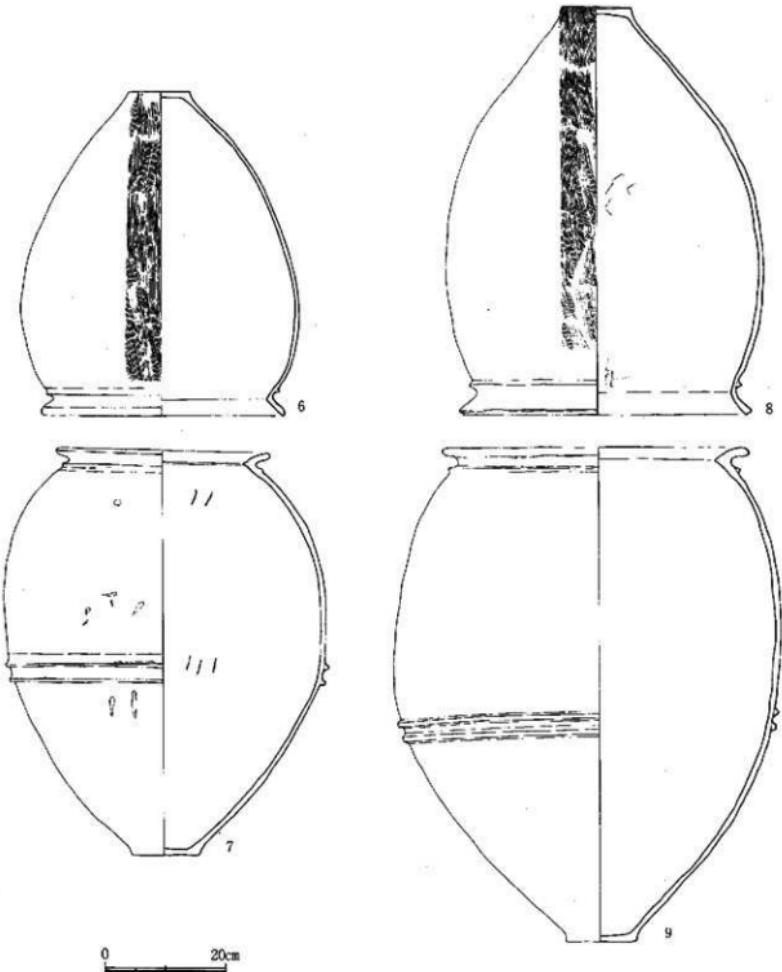


Fig. 8 出土遺物実測図2 (1/8)

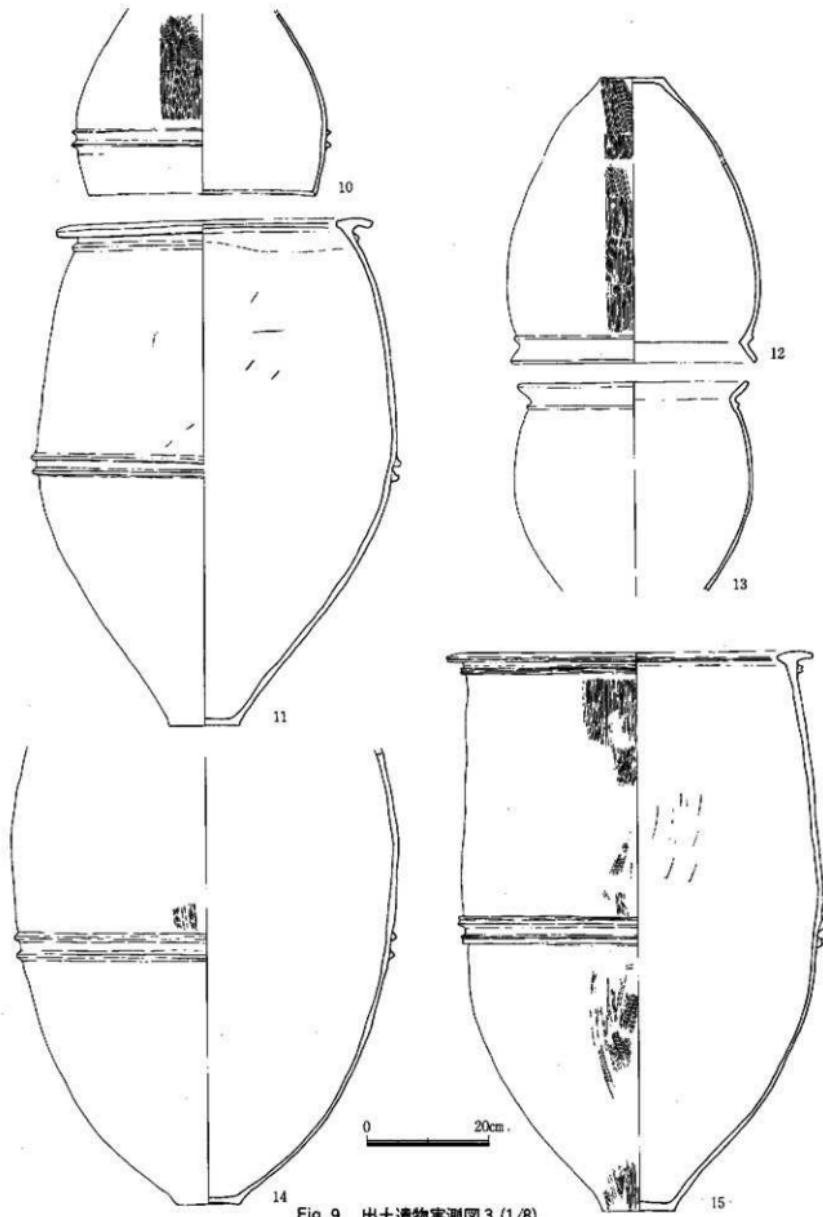


Fig. 9 出土遺物実測図 3 (1/8)

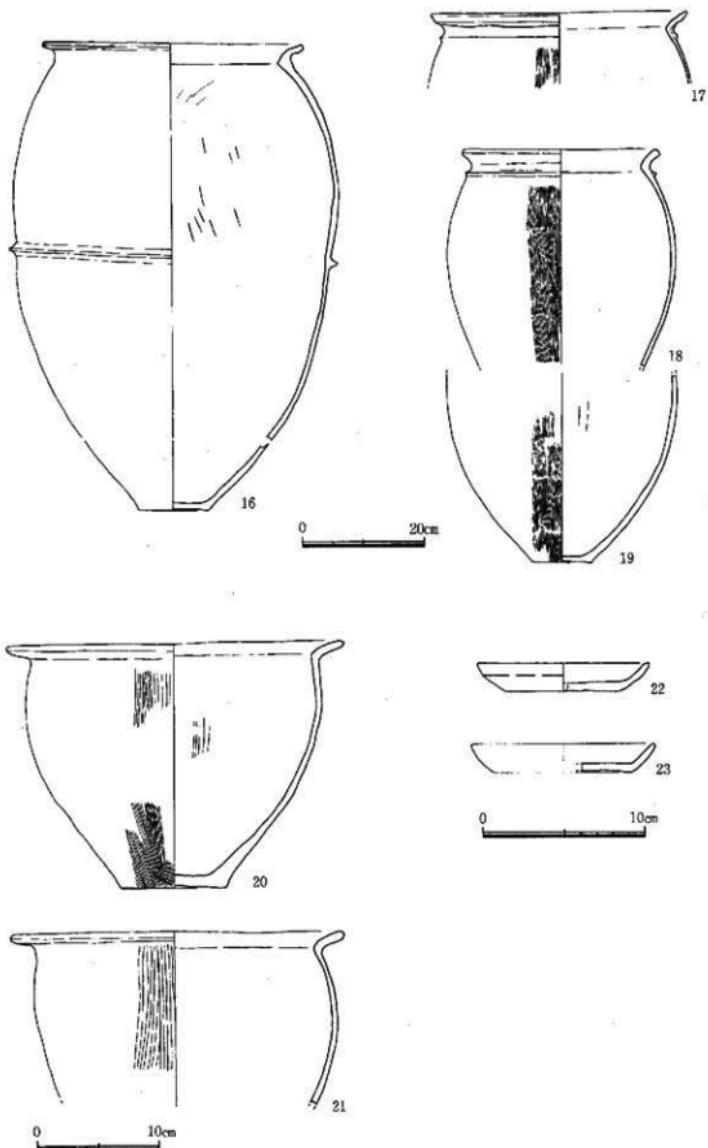


Fig.10 出土遺物実測図 4 (1/8.1/4.1/3)

テを施す。外面から内面口縁屈曲部直下まで赤色顔料がみられる。胴部外面は突帯より下に縱方向の刷毛目を施す。上部は不明。突帯間には暗文が見られる。研磨調整は確認できない。内面はナデで、底部に黒斑が見られる。底部はわずかに上げ底である。4は下壺に使用された壺である。ほぼ完形に復元できた。器高35.5cm、口径29cmを測る。腹部最大径は上半にあり27.5cmを測る。口縁は内溝し「く」の字に近いL字形を呈し、端部は跳ね上げ気味である。器盤外面は粗ておりはっきり観察できないが、口縁部を除き粗い刷毛目を全体に施す。内面はナデだが上半に刷毛目調整の痕と思われる痕跡が見られる。淡橙色を呈す。

**ST04** ST02の東20cmに位置する。主軸をN-28°-Eにとる小形壺である。壺が単体で出土している。出土状況からして上壺の存在は考えがたい。单棺と考えられる。墓壙は長さ55cm、幅65cmを測る。壺棺埋置角度は約10°を測る。深さは検出面から27cmである。頸部から口縁部は削平され、落ちた箇所のみ残存する。また、床に接する胴部下半の一部が欠けている。

**出土遺物** 出土した遺物は壺棺に使用した壺形土器1点である。5は欠ける部分が多い。器高39cm、口径23cmを測る。胴部最大径はほぼ中央にあり31cmを測る。口縁は丸みを帯びた錐形口縁で、外にや下がる。口唇部端面は強くナデて僅かに窪む。頸部には2条、胸部に2条の断面M字突帯が巡る。外面は胴部突帯より上に赤色顔料を施す。器面は粗れておりはっきり観察できない。内面はナデで頸部に指押さえ痕が見られる。底部は打ち欠きにより孔があく。

**ST05** 調査区中央に掘り方を持つ。上壺が中形、下壺が大形の合口式の壺棺で、主軸をN-38°-Eにとる。ほぼ完形で残り、棺内の空間が保たれ、1体の人骨が出土した。墓壙は長さ150cm以上、幅150cm以上を測る。検出面より130cmを掘り、そこから南西に斜方向に掘り込む。埋置角度は約35°を測る。深さは検出面から170cmである。合わせ部は粘土で目張りをしている。

**出土遺物** 出土した遺物は壺棺に使用した壺形土器2点である。8は上壺に使用された壺である。ほぼ完形である。器高68cm、口径48cmを測る。胴部最大径は上半にあり63cmを測る。口縁直下に1条の断面3角形の突帯が巡り、強いヨコナデを施す。口縁部はく字形を呈し、内面屈曲部は弱い稜を持つ。縫部は強いナデによりくばむ。内外面にはスリップを塗り、口縁部は厚く、外面の下部に行くにつれて薄くなる。胴部外面は縱方向の刷毛目を施し、内面は擦過状の刷毛目が残る。胴部中位から下部に2カ所黒斑が見られる。底部はわずかに上げ底である。9は下壺に使用された壺である。完形に復元できた。器高80cm、口径51cmを測る。胴部最大径は上半にあり63cmを測る。口縁は内傾する錐形口縁を呈す。口縁部直下に1条の断面三角形、頸部に2条の断面台形の突帯が巡る。器盤外面は全体はナデ調整だが、縦方向の刷毛目の痕跡が黒塗り状の痕跡と共に僅かに見られる。内面はナデだが木口痕があり、縦方向の刷毛目調整がなされたと考えられる。やや赤味を帯びた茶色を呈す。

**ST06** 南東に位置し、上壺のほとんどが削平を受ける。ST06と切り合いがあるが、埋上の区別がつけ難い。ST05が切ると判断したが確信のものではない。主軸をS-32°-Wにとる呑口式の壺棺である。上壺は上部を打ち欠いた中形の壺で、下壺は大形の壺である。墓壙は長さ135cm以上、幅120cm以上を測る。墓壙埋置角度は約14°を測る。深さは検出面から110cmである。下壺の一部を僅かに横穴に差し込む。上壺は胴部突帯より上を打ち欠く。

**出土遺物** 出土した遺物は壺棺に使用した壺形土器2点である。10は上壺に使用された壺である。胴部のみ残る。残存する上部は打ち抜く。器高30cmが残る。胴部最大径は中位にあり41cmを測る。断面台形の突帯が巡る。器面は粗ている。11は下壺に使用された壺である。ほぼ完形に復元できた。器高83cm、口径52cmを測る。胴部最大径は下半にあり60cmを測る。口縁部は錐形を呈し、直下には断面3角形、胴部最大径部には断面台形の突帯を巡らす。外面はナデで縦方向の刷毛目の痕跡が黒塗部に僅かに見られる。内面はナデだが木口痕が残る。外面は白っぽい黄色で、口縁部と突帯に赤みを帯びた

薄い茶色のスリップを塗る。

**ST07** 北よりのやや下がった箇所に位置する。上左右が削平を受け、現位置を止めているのは合わせ口部のみである。主軸をN-57°-Eに取る中形の合口の壺棺である。墓壙は南側と床が僅かに残る。北西側斜面から掘削、挿入したものか。

**出土遺物** 出土した遺物は壺棺に使用した壺形土器2点である。12は上壺に使用された壺である。1/3強が残存する。口縁部はくの字に近い錐形口縁で内面屈曲部は強いナデにより尖る。口縁部直下には断面3角形の突帯が巡る。外面は縱方向の刷毛目で黒塗りか煤の痕跡がある。内面はナデで底部には刷毛目が残り、下部は黒斑がみられる。13は下壺に使用された壺である。1/3弱が残存する。残存器高35cm、復元口径37cmを測る。口縁部直下には断面3角形の突帯を巡らす。外面は粗しており調整は不明。内面はナデ調整である。僅かに煤の痕跡が残る。白っぽい黄色を呈す。

**ST08** 調査区から12m離れた畑の部分で偶然検出した。床部分が僅かに残るのみである。削平の具合から2m近くの深さの掘り方を持つものと考えられる。主軸はN-55°-E埋置角度は15°ほどか。

**出土遺物** 出土した遺物は壺棺に使用した人形の壺形土器1点である。14は胴部まわり1/3弱が残存する。反転復元のため正確な器形ではないが、やや下ぶくれ気味である。残存器高74cm、胴部最大径64cmを測る。肩部中位に断面台形の突帯が2条巡る。器面は粗しているが、外面に僅かに密な刷毛目が縱方向に残る。また、僅かに黒塗りか煤の痕跡がある。

## 2) その他の遺構

**SX13** 調査区の北側が深さ2mほど削平され、調査区の西側に伸びる。埋土は混じりのないバイラン土である。この中には壺棺が現位置を留めず、床から50cmほど浮いた状態で大きく2ヵ所に分かれて出土した。後にはほぼ完形に復元できた。大きな破片が重ねて置かれおり、難に投げ捨てた様子でもない。

**出土遺物** 壺形土器1点である。15はほぼ完形に復元できた。器高93cm、口径60cmを測る。胴部最大形は下半にあり58cmを測る。胴部上半は直線的に伸びる。口縁直下に1条、胴部最大径直下に2条の断面M字形の突帯が巡る。口縁部はT字形を呈し、内外の端部を強くナデすることで窪みを巡らせる。内面全体にスリップを施す。外面は粗のため所どころしか確認できなかったが全体に施したと考えられる。外面は縱方向の刷毛目を施す。内面は木口痕が見られ、スリップの上から刷毛条の調整が特に上半に見られる。

## 3) 表採遺物

16から19は埋葬に使用されたものと考えられる。16は人形の壺で完形に近く復元できたが底部が接合しない。推定器高77cm、口径43cmを測る。胴部最大形は上半にあり52.5cmを測る。胴部に1条の断面台形の高い突帯が巡る。口縁部はくの字形に近いが鷲先口縁の形態を残す。外面はナデで内面は木口痕が残る。胴部突帯下には4つの縦長の内面からの穿孔がある。埋葬時には下側と考えられる部分である。新しい傷も周囲にあり、後世のとも考えられる。17は壺形土器で口縁部外側に段がつく。内面は刷毛目の後丁寧なナデを施す。外面は刷毛目調整である。18は壺形土器で1/2弱が残存する。くの字口縁の直下に断面3角形の突帯を巡らす。外面は密な縱方向の刷毛目で内面はナデである。19は18と同一個体と思われるが接合しない。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデだが僅かに刷毛目が見られる。20は小形の鉢形土器ではほぼ完形に復元できた。外面は密な刷毛目で、内面はナデ調整で僅かに域毛目が残る。21は胴部上半のみが残る。外面は縦方向の粗な刷毛目で、内面はナデである。22と23は表土の掘削中に出土した土師皿である。いずれもヘラ切り底で1/3が残存する。

## IV. おわりに

狭い面積の調査ではあったが、小堀塚3基、成人塚5基を検出し、内1基からは人骨が出土した。以下、壺棺の時期等にふれておきたい。壺棺の編年については、近年、中形壺について分けて分類し、大形壺との併行関係を計るものがある。ここでは、それらの編年案に従ってふれていきたい。<sup>(1)</sup>

まず、大形壺について、橋口編年に沿って位置づけを行えば、SX013(15)がKIIIa式、ST05下(11)がKIIIb式、ST02下(7)・05下(9)・表探(16)がKIIIc式となろう。(16)などは、KIVa式に入るとも考えられるが、基本的に鉢形口縁の形状を残すものはKIIIcの分類の中に入るものと考えておきたい。また、KIIIc式とした壺棺3基とも外面にナデ調整を施し、地域性を考える上で示唆的である。次に中形壺である。今回出土したものは、「く」の字口縁といえるものばかりである。「く」の字口縁については從来後期に分類されていたが、速水信也によって中期中頃からの存在が指摘されている。<sup>(2)</sup>ここでは川上洋一の分類に従えば、(18)がBII、ST02上(6)・ST07上(12)・下(13)がBIII、ST05上(8)がBIVまたはBVとなる。大形壺との組み合わせは、BIIはKIIIa・b・c、IVa式と、BIIIはKIIIc、IVa式という具合に幅があるためST02については矛盾するところはない。ただしST05上(8)は、これをBVとすれば後期併行となる。川上の日常土器の編年観が明示されておらず、資料数が少ない感もあるがいずれにしてもこれまで後期に分類してきた土器である。これが(9)と組み合わせになることに矛盾はないが、KIIIc式とKIVa式の連続性を考えさせる1例となろう。また、ST05は小形壺ST03に切られる。

ST03はくの字口縁に近いL字口縁の壺(4)と丹塗りの壺(3)の組み合わせである。(3)は胴部下半に刷毛目が明晰に残る。丹塗り土器の中でも新しい部類のものであり、後期初頭におく編年観もある。ST05の埋葬後それほど時を置かずに埋葬されたものと考えられる。以上、出土土器について近年の編年に照らし、KIIIc期からKIVa期の連続と、そこに中期から後期という時期区分のあいまいさを改めて確認した。再検討の必要はあるが今回の調査で出土した壺棺群はKIIIa期からKIIIc期の範囲でとらえておきたい。

今回の報告では、検討不足と資料の少なさから十分に長峰遺跡の位置付けを行うことは出来なかつた。先に確認した問題点の他に、この地域の地域性、立地ごとの墓地のあり方等考えるべき課題は多い。幸い早良平野では、吉武、東入部、浦江谷、野芥岩隈等の墓地の調査が行われ、各時期の様相の異なる墓地が調査されている。これらの報告がでた時点より詳細な検討ができるものと思われる。

注 (1) 橋口達也「壺棺の編年研究」「九州縦貫自動車道年度係り文化財調査報告書」31、福岡県教育委員会、1979

(2) 速水信也「横隈狐塚Ⅱ区出土壺棺の変遷」「横隈狐塚遺跡Ⅱ」、小都市教育委員会、1985

(3) 川上洋一「弥生時代の北部九州における壺棺と日常土器の併行関係に関する」、「櫛原考古学研究所論集第十一集」1994

# 長峰遺跡出土の人骨について

金宰賢・石井博司・田中良之

## 1. はじめに

福岡県長峰遺跡の2次調査において、5号壺棺から1体の人骨が出土した。人骨は検出から実測・取上げ・整理・復元の各過程を、九州大学人文学院比較社会文化研究科基層構造講座で担当した。この章では本人骨の出土状態・人骨所見について報告する。

## 2. 出土状態(図1)

人骨が出土した5号壺棺は調査区南西側に位置する合口式壺棺である。左右大腿骨は後面が上方に、左右脛骨は前面が上方に向いており、大腿骨近位端と脛骨遠位端が下壺の底部に位置している。また、大腿骨頭に連続して寛骨の破片を認める。

両下肢骨の間には頭蓋骨が頭頂を下に、外頭蓋底を上方に向いた状態で位置し、上肢骨は頭骨のさらに下に位置する。上腕と前腕の位置関係からみて、両前腕を胸腹部で交叉させた状態であったものが、下方に崩落したものと考えられる。

このような状態から、埋葬時には仰臥位で下肢を強屈した状態であった人骨が、腐蝕の過程で、まず上肢骨が下壺底部に流れ込み、その後、頭骨が両下肢骨の間に転落したものと推定される。また、下肢の強屈の状態からみると、埋葬時は緊縛していた可能性がある。

## 3. 人骨所見

### 3-1. 保存状態と形態観察

遺存する人骨の保存状態は全般に良好で、頭骨は眉弓の一部を除いた前頭骨と涙骨を含む上顎骨片、頸骨の一部が残っている。残存する前頭骨の左側眉弓は強く発達している。また、両側頭頂骨と後頭骨はほぼ完全な状態で遺存するが、側頭骨は左側頭骨がよく残っているのに比べ、右側頭骨は外耳孔を中心とする一部のみ残存している。後頭骨の外後頭隆起の発達は強い。頭蓋縫合は、右側冠状縫合が一部残っていないものの、主要3縫合の他の部分は内・外板ともに完全に開いている。外頭蓋底はほぼ下頬窓と大後頭孔の一部のみ認められる。下頬は右側筋突起と下頬体の一部が残存するくらいで、右側の一部を除いた部分の歯槽の閉鎖状態を確認することは困難である。なお、本人骨から得られた残存歯式は以下の通りである。

M <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>							P <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	
×	×	×	P <sub>2</sub>	/	/	/	/	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	/

○歯槽開放 ×歯槽閉鎖 /欠損 △歯根のみ ●遊離歯 Cう齒

残存している歯牙の咬耗度はいずれも橋原の1b~1c度である(橋原, 1957)。

上肢は右肩甲骨片、左右上腕骨体片、左右尺骨と左桡骨の近位端が認められる。上腕骨の三角筋粗面は強く発達している。なお、転幹骨は部位の同定が困難な肋骨片のみ残っている。

下肢は恥骨結合面の観察が可能な左側寛骨片と右側寛骨の内腸骨片と坐骨片の一部が残存する。寛

骨片において、残存する閉鎖孔内縁・上前腸骨棘にはリッピングの所見を認めない。大腿骨は左側が大腿骨頭の一部を含む骨体と右側が骨体のみが認められる。大腿骨粗線は強く発達している。両側脛骨は骨体が残存し、腓骨は右側の遠位端と左側の骨体の一部が残っている。

### 3-2. 性判定

後頭骨の外後頸降起の発達が強いことと、残存する前頭骨の左側岩弓が強く発達していること、上腕骨の三角筋粗面と大脛骨粗線の発達が強いことなどから、本人骨は男性と判定される。

### 3-3. 年齢推定

#### 1) 頭蓋縫合

主要3縫合は観察されうる限りにおいて全て開いている。

#### 2) 堂牙・齒槽

残存歯牙の咬耗度は橋原の1bから1c度である。まず、左側歯牙の道存状況と咬耗度を図2に示す。上顎第2小臼歯近心側と下顎第2小臼歯遠心側は対咬関係にあるが、両者は同程度に咬耗している。各々に隣接する上顎第1大臼歯と下顎第1小臼歯は対咬関係にある歯牙が残っていないが、やはりほぼ同程度に咬耗している。このような状況から、生前の咬耗度をある程度想定しうるものと考えられる。

さて、本例においては下顎右側第1・第2大臼歯の歯槽は閉鎖しているが、隣接する第2小臼歯の部分に歯槽後退がほとんどみられないこと、および右側上顎第1・第2大臼歯の咬耗度が1c度であることなどから、この歯槽閉鎖は、若い段階でなんらかの病的要因が作用した結果生じたものと考えられる。ただし、本例の堂槽閉鎖部では骨吸収がかなり進行しているため下顎体がかなり細くなってしまおり、このような所見に至るにはある程度の期間を要するものと考えられる。対咬する上顎第2小臼歯と下顎第2小臼歯の咬耗度(1c度)とあわせて、成年でも中頃以降、然後半には至らない年齢が考えられる。

#### 2) 寛骨

まず、左側恥骨結合面においては、上結節付着部に表面不整、辺縁不整の骨結節を認める。通常認められる上結節とは形態の大きく異なる、いわゆる異形成(dysplasia)の所見と考えられ、このような所見の下では結合面周囲のフェーズ判定には一定の限界がある(Todd,1920)。ただし、傾斜面表面が比較的整で上半の崩壊が進行しておらず、外側になんら骨棘を認めないことからすれば、埴原8期以降になる可能性は低い。このことは閉鎖孔内縁・上前腸骨棘に骨棘がないこととも矛盾しない。埴原8期は10代前半に該当するとされるが(埴原,1952)、成年以降で熟年後半には至らない年齢が本所見から示唆されるものと考えられる。

#### 3) 関節周囲

遺存している関節面の周囲には骨棘が一切認められない。

以上、各所見から、成年後半から熟年半かけての年齢が推定されよう。

### 3-4. 形質

5号臺棺の出土人骨に対し、計測可能な値を表1-6に示す。なお頭骨は額面が欠損しているため、主要な計測値の多くは計ることができなかつた。現場で人骨の検出時に計測された右大腿骨の最大長が43cmであることから、Pearson式による推定身長は162.1cmである。頭骨小変異の有無を表7に示す。

#### 4. おわりに

以上、本遺跡の5号窓棺から出土した人骨は成年後半から老年前半に属する男性を埋葬したもので、身長は162cm前後であることが推定された。

最後に、調査段階から今日までいろいろと便宜をはかっていただいた福岡市教育委員会の池田祐司氏に感謝申し上げたい。

#### 参考文献

- Martin, R., 1922: Lehrbuch der Anthropologie II.  
 横原溥, 1957: 日本人両耳咬耗に関する研究. 熊本医学会雑誌, 31, 補附 4.  
 Todd, T. W., 1920: Age changes in the pubic bone. Am J Phys Anthropol, 3.  
 堀原和郎, 1952: 日本人男性恥骨の年齢的变化. 人類学雑誌, 62.  
 Pearson, K., 1899: Mathematical contribution to the theory of evolution. V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races. Phil Trans Royal Soc, Series A, 192.

表1 頭蓋主要計測値

マルテンNo.	項目	5号窓棺人骨(♂)	(mm)
1	頭蓋最大長	—	
8	頭蓋最大幅	148	
9	最小前頭幅	95	
11	両耳幅	(125)	
17	Ba-Bc幅	—	
25	正中矢状弧長	—	
26	正中矢状前頭弧長	—	
27	正中矢状頸部弧長	134	
28	正中矢状後頸部弧長	114	
29	正中矢状前頭弦長	—	
30	正中矢状頸部弦長	120	
31	正中矢状後頸部弦長	95	
43	上頸幅	(102)	
45	頸骨弓幅	—	
46	中頸幅	—	
47	頸高	—	
48	上頸高	—	

表3 椎骨計測値

マルテンNo.	項目	5号窓棺出土人骨(♂)	(mm)
3	最小周	—	45
4	骨体横径	—	17
5	骨体矢状径	—	12
5/4	骨体断面示数	—	70.6

表4 尺骨計測値

マルテンNo.	項目	5号窓棺出土人骨(♂)	(mm)
11	尺骨矢状径	(15)	12
12	尺骨横径	—	18
11/12	骨体断面示数	—	66.7

表5 大腿骨計測値

マルテンNo.	項目	5号窓棺出土人骨(♂)	(mm)
6	骨体中央部矢状径	(27)	(28)
7	骨体中央部横径	(26)	(26)
8	骨体中央周	(84)	(86)
9	骨体上横径	29	30
10	骨体上矢状径	25	25
6/7	骨体中央断面示数	103.8	107.7
10/9	上骨体断面示数	86.2	83.3

表2 上腕骨計測値

マルテンNo.	項目	5号窓棺出土人骨(♂)	(mm)
5	中央部大径	(23)	(22)
6	中央最小径	(17)	(16)
7	骨体最小周	—	60
7 a	中央周	(67)	(66)

表6 頸骨計測値 (mm)

マルチンNo.	項目	5号墳出土人骨(♂)	
		右	左
8	中央最大径	(29)	(31)
8a	榮養孔位最大徑	—	33
9	中央横径	(22)	(23)
9a	榮養孔位横径	24	25
10	骨体周	(82)	(86)
10a	榮養孔位周	—	93
10b	最小周	76	77
9/8	中央断面云数	75.9	74.2
9a/8a	榮養孔位断面示数	—	75.8

表7 長峰遺跡5号墳出土人骨の頸骨小窓異

小窓異	右	左
インカ骨	—	—
ラムダ小骨	—	—
横後頭縫合	—	—
上矢状洞溝左傾	—	—
顎管欠如	/	/
舌下神経管二分	/	/
頸靜脈孔二分	/	/
頸前結節	/	/
第三後頭鰓	/	/
アステリオン骨	/	+
後頭乳突窓合小骨	/	—
鼓室骨裂孔	/	—
外耳道骨壁	—	—
頸頂切痕骨	/	—
頸頂孔欠損	+	—
鱗状縫合小骨	/	—
翼頸孔骨塊	/	/
前頭側頭連続	/	—
前頭縫合	—	—
眼窩上縁孔	—	—
副頭窩下孔	/	/
内側口蓋骨塊	/	/
上頭隆起	/	/
口蓋隆起	/	/
床状突起咽骨塊	/	/
副オトガイ孔	—	/
二分喉骨	/	/
頸骨頸面孔欠損	—	—
下頸隆起	—	/
顎舌筋神經骨橋	—	/

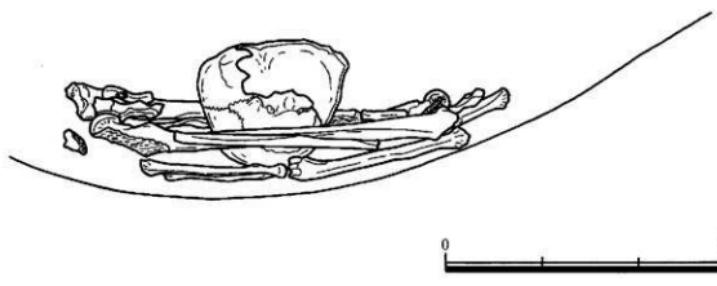
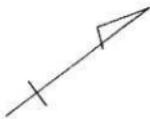
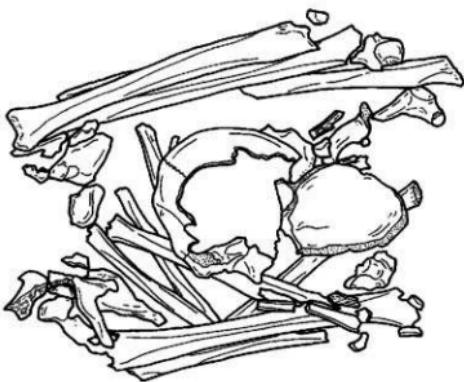
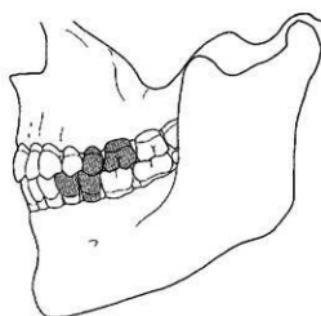


図1 5号壺棺人骨出土状態



(スクリーントーンは残存している歯を示す)

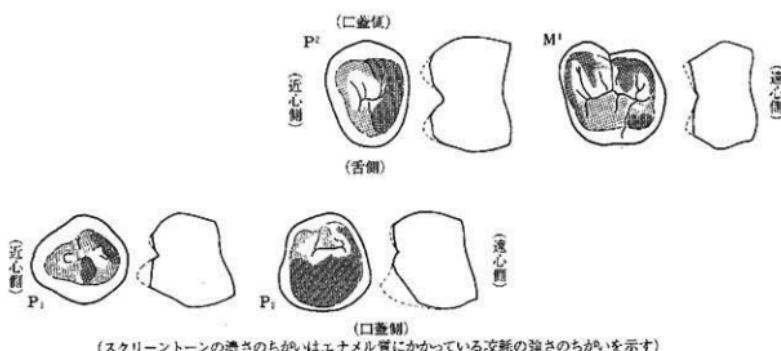
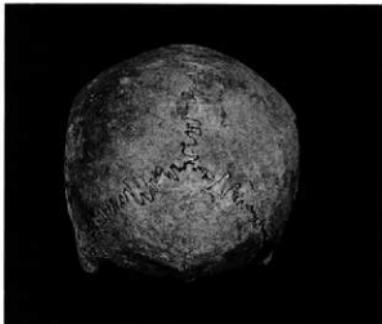


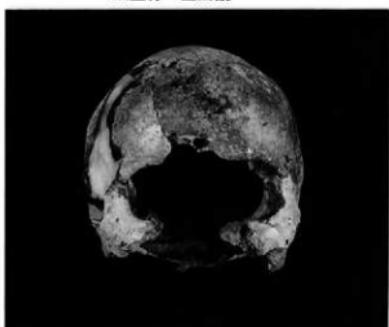
図2 左側残存歯の咬耗状況



頭蓋骨 上面觀



頭蓋骨 後面觀



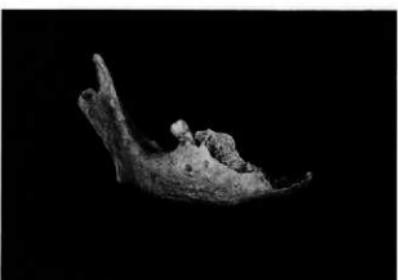
頭蓋骨 正面觀



下顎骨 上面觀



頭蓋骨 側面觀

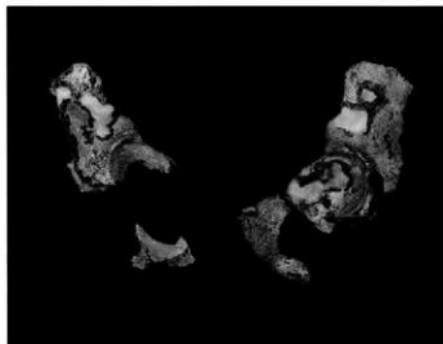


下顎骨 正面觀

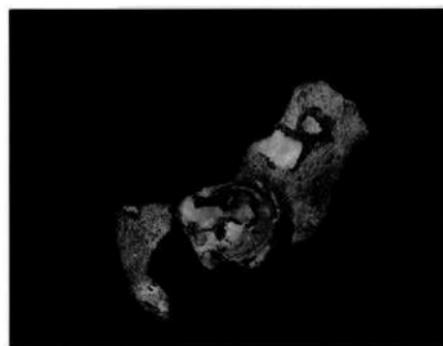
写真1 5号墓棺出土人骨(1)



上肢骨



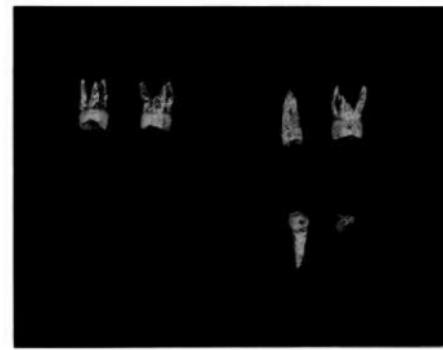
骨盤



左侧寛骨



下肢骨



歯牙

写真2 5号墓棺出土人骨(2)

# 図 版



(1) 調査前（南西から）



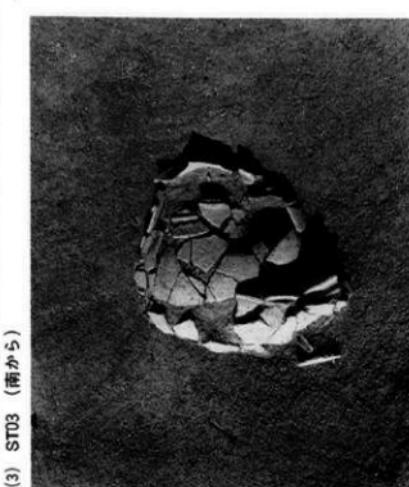
(2) 調査区、早良平野を望む（南西から）



(1) 調査区全景（東から）



(2) 調査地点周辺



(3) ST03 (南から)

(4) ST04 (南から)



(1) ST01 (北から)

(2) ST02 (北から)



(3) ST07 (北から)



(4) ST08 (南西から)



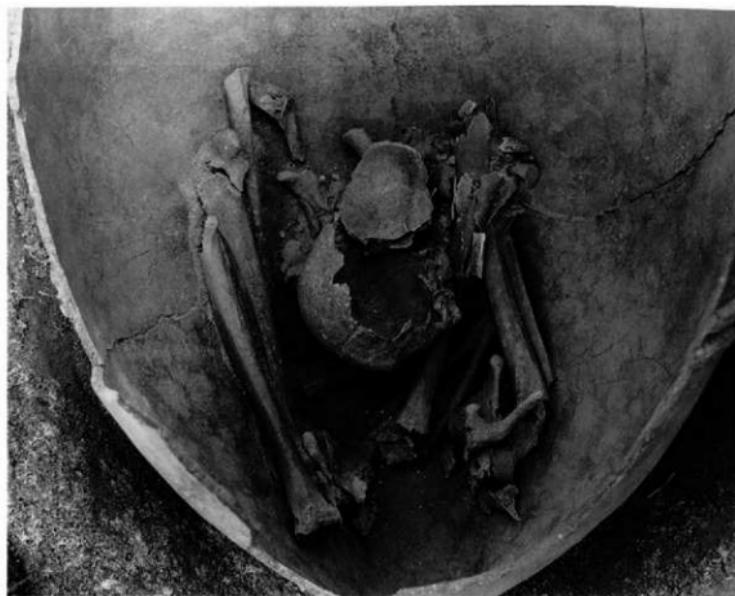
(1) ST05 (北から)



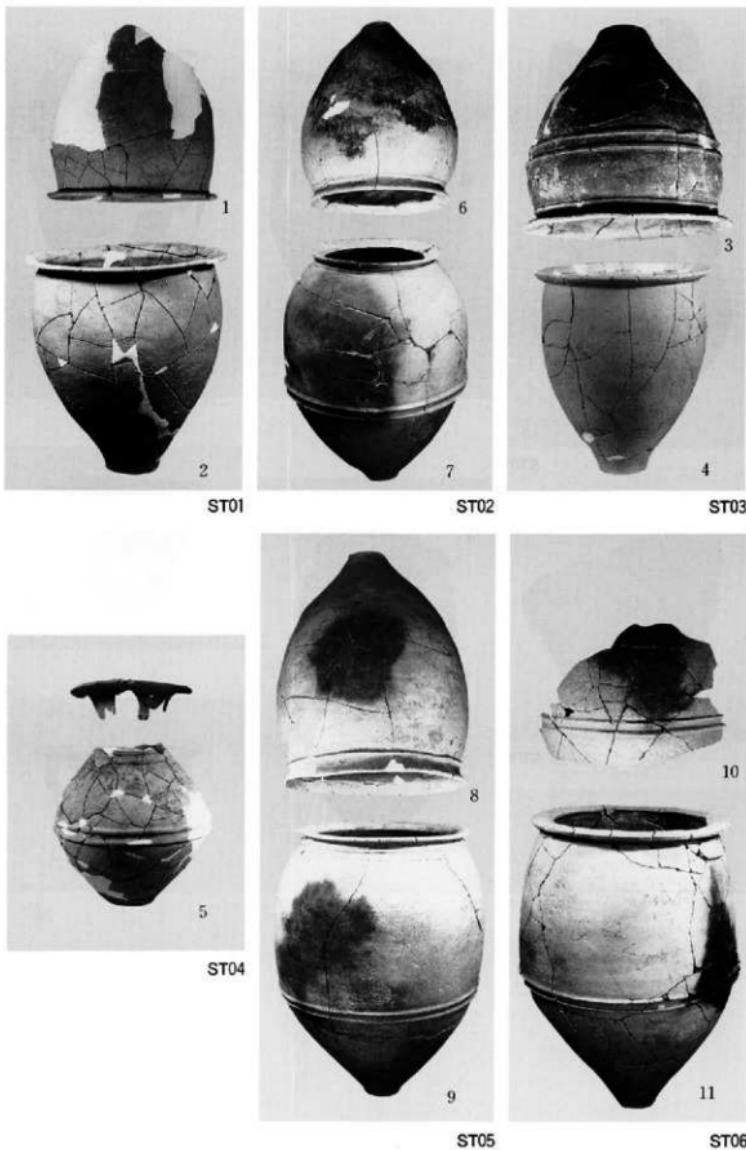
(2) ST06 (東から)



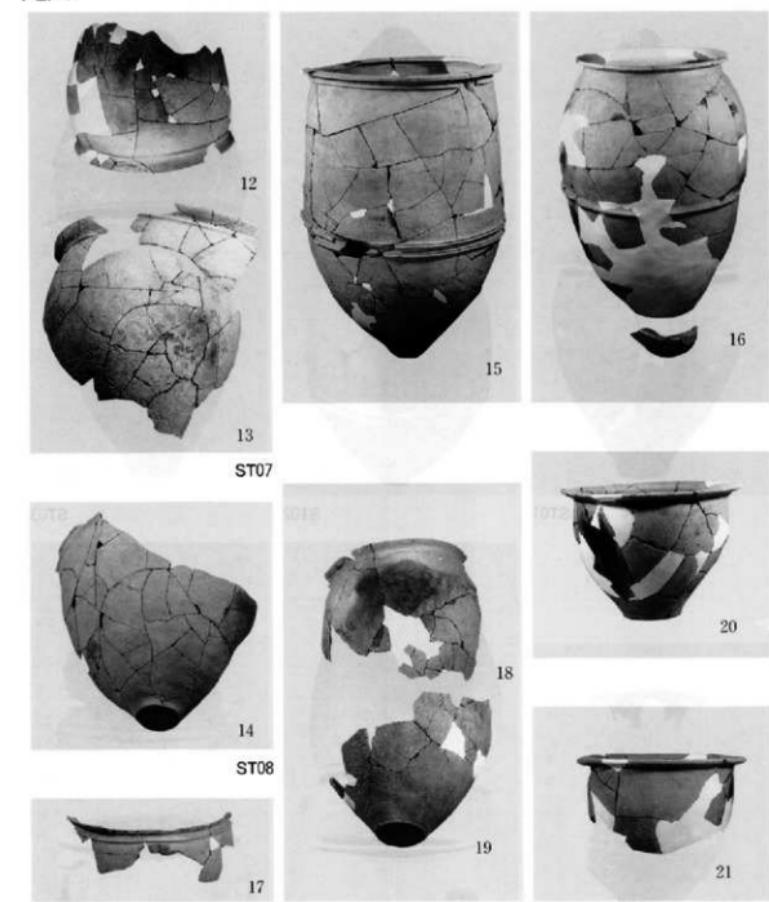
(1) ST05 人骨出土状況（北から）



(2) ST05 人骨出土状況（西から）



出土遺物 1



出土遺物 2

---

## 長峰遺跡 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第462集

1996. 3. 29

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 久野印刷株式会社  
福岡市中央区天神5丁目5-8

---



